

# 「明確化」作業による外国語学習の事例研究 —肯定文・疑問文・丁寧語などを中心として—

## Case Studies for Studying a Foreign Language by Work of “Clarification”

宮 玲子  
Reiko MIYA

### Abstract

The method of using the lecture of both a so-called Japanese teacher (no native) and the foreigner teacher (native) together is adopted in the study curriculum of the foreign language in the 1.2th grader of the university or a general language school in Japan today.

The research object of this thesis is ,so to speak, a different kind synonym. The Japanese term used in a translation is the same word though this is a different word. It is a word that there is a limit in their explanations of it in Japanese though such a word is a meaning of a word that only the native teacher understands. Therefore, it is a word that no native teacher should explain in Japanese.

The purpose of this thesis is to present the concept of effective “Clarification” work to acquire the foreign language. Moreover, the meaning of the concept is examined, and, in addition, a concrete case is presented. This concept is a method effective to study the course of the introduction, the base, and the beginner’s class in chiefly the first grader of the university or studying a foreign language of the second grader and general language school.

**キーワード**：外国語教育、外国語学習、英語学習、韓国語学習、基礎・初級、明確化

**Key Words**：Education of Foreign Language, Studying a Foreign Language, English Study, Korean Study, Basic and Beginner’s class, Clarification

## 1. はじめに

今日、我が国の大学学部での1、2年もしくは一般の語学学校における外国語の学習カリキュラムでは、いわゆる日本人教員（ノン・ネイティブ）と外国人教員（ネイティブ）の双方の講義を併用する方法がとられている。こうした方法の背景には、外国語教育において、ネイティブおよびノン・ネイティブの双方の教員が施行できる教育効果にそれぞれ限界があり、そうした限界を補完する意義があるからと考えられる。例えば、発音はどうしてもネイティブ教員の領域であり、日本語による翻訳や文法解説は否応なくノン・ネイティブ教員の責任分野である。本稿では、外国語の表記では異なる単語でありながら、それを日本語に翻訳すると同義の訳語になってしまう題材を取り扱う。これは、ネイティブ教員にしか分からないニュアンスでありながらそれを解説するには限界があり、ノン・ネイティブ教員が日本語で解説する必要がある単語である。ここではそうした「異種同義語、とも云うべき難解な単語を修得させるための教育過程で有効な「明確化（Clarification）」作業というコンセプトを提示し、その事例と意義について論じていく<sup>(1)</sup>。

なお、本稿は、あくまでも入門・基礎・初級レベルの外国語学習や外国語教育の過程における効果的な作業手続きについて論じた内容であり、中級以上の学習過程や教育過程を念頭に置いた議論ではない。また同時に、外国語学習法や外国語教育法の原理論そのものを論じたものではない。ゆえに、筆者の専門もあくまで日本とアジアを中心とする国際関係論や地域研究であり、外国語教育法や英語・韓国語の専門家ではない。したがって、本稿も英語や韓国語の学習や教育そのものを題材とする論文ではなく、筆者の専門である国際関係論や地域研究を学習するための最低限必要な外国語一般の基礎的な習得を目指した手法の提言に過ぎず、その究極の目的は、むしろ我々自身の母国語たる「日本語」の技術向上にあることを明記しておく<sup>(2)</sup>。

## 2. 「明確化」作業の意義と手順

ところで、本稿で提示する「明確化」作業というコンセプトは、以下のようなものである。

（手順1）

まず、1枚のカードに①単語Aを使った外国語の例文と、②単語Bを使った外国語の例文を併記し、その横に双方の文章に共通となる日本語の訳語を記す。

（手順2）

次に、その下に文頭を下げて、①単語Aを使った外国語例文のより詳細な意味を（ ）付きの日本語の訳語として記す。同様に、②単語Bを用いた外国語例文のより詳細な意味を（ ）付きの日本語の訳語として記す。ここで、（ ）の後に続く訳語は共通であるが、（ ）内に付記する詳細な意味は異なることになる。これが「明確化」の意味である。

## (手順3)

最後に、その下に矢印で強調しながら、もう一度双方の外国語例文に共通の日本語の訳語を記す。

## 〈例題〉

- ① A文      訳語 T  
 ② B文  
   ①' (a) T  
   ②' (b) T  
       ↓  
       T

正確を期すために、今一度定式化しておく。ここで、上記のダイアグラムにおいて、まず①と②は、2種類の異なる単語を使った外国語の例文を表記したものである(A文B文)。その右側には、双方の例文における該当単語の日本語訳が記されている(T文)。①と②は、異なる単語を使っているにもかかわらず、その日本語訳は共通の同義文となることが理解できる。次に①の外国語例文について、特に②の外国語例文とは異なる単語を使用している部分について、( )付きでその詳細かつより正確な語義を理解できるような補足文を付け加え(a)、それに続いて本来表面に出ている日本語の訳語を記す。この( )付きの補足文が、当該単語とその他の異種同義語との意味の違いを「明確化」した部分であり、従って、この( )付きの補足文を付け加える作業を「明確化」作業と呼ぶ。また、上記の作業を行なった文を①'とする。

同様にして、②の外国語例文についても、特に①の外国語例文とは異なる単語を使用している部分について、( )付きでその詳細かつより正確な語義を理解できるような補足例文を付け加え(b)、それに続いて本来表面に出てくる日本語の訳語を記す(T)。この部分の作業を「明確化」と呼ぶことはすでに述べた。なお、上記の作業を行って出来上がった文を②'とする。

最後に、①'②'の下段に下向きの矢印を記し、双方の外国語例文に共通の日本語訳語をもう一度記す。これで、「明確化」作業の完成である。こうした1組のペア単語をそれぞれ1枚のカードに記し、それをファイリングしてストックしていくわけである。

ここでは、①と②の外国語例文においては双方とも共通の訳語が該当しており区別のつかないペア単語であるものが、①'と②'における( )付きの補足文によってより「明確化」された形で各単語の語義が示され、さらに、リファインされた日本語の訳語ではそれらがあくまでも同義=同じ訳語となることがイメージとして作成者に認識される。こうした作業を繰り返し遂行することにより、初期の外国語学習における重要単語の暗記、他の異種同様の単語との厳密な意味の違いの理解、その使用法、特に、読解力とともに「作文力」を養うことが期待できるのである。

### 3. 「明確化」作業の実践例

さて、以上のような意義と手順に基づいて遂行される「明確化」作業について、本章ではその実践例を紹介する。なお、ここでは西洋言語の中から英語、東洋言語の中から韓国語を選び、その事例を作成する。

- ① I will go.          行く
- ② I will come.
- ①' (他の場所へ) 行く
- ②' (相手の方へ) 行く (来る)
- ↓
- 行く

まず、西洋言語を代表させて英語の事例を見てみよう<sup>(3)</sup>。上記の事例について、①および②の文の日本語の訳は同様に「行く」である。しかし、使用している単語の違いにより、より正確な意味はそれぞれ「他の場所へ行く」と「相手の方へ行く」となる。そこで、①'②'にその意味を( )付きで記述し、両者の違いを「明確化」する。あとはもう一度最後に訳語「行く」を確認のために付記する。以下、同様の事例をいくつか挙げておく。

#### (事例1)

- ① I always wake up at seven.          目を覚ます。
- ② I always get up at seven.
- ①' (単に) 目を覚ます。
- ②' (起き上がる動作を含めて) 目を覚ます。
- ↓
- 目を覚ます。

#### (事例2)

- ① He thrust me.          押す。
- ② He press me.
- ①' (強く素早く) 押す。
- ②' (次第に圧力をかけて) 押す。
- ↓
- 押す。

## (事例3)

① She was surprised by his opinion. 驚いた。

② She was startled by his opinion.

①' (単に) 驚いた。

②' (いきなりぎょっとして) 驚いた。

↓

驚いた。

## (事例4)

① We differentiated the real bills from the bogus bills. 分ける。

② We tell the real bills from the bogus bills.

①' (同一のものを区別するという意味で) 分ける。

②' (単に) 分ける。

↓

分ける。

## (事例5)

① I reply to the question. 答える。

② I respond the question.

①' (よく考えて) 答える。

②' (即座に) 答える。

↓

答える。

## (事例6)

① He examines this paper. 調べる。

② He studies this paper.

①' (詳しく) 調べる。

②' (より綿密に) 調べる。

↓

調べる。

## (事例7)

① She has a power. 持っている。

② She holds a power.

- ①' (単に) 持っている。
- ②' (より強く) 持っている。

↓

持っている。

## (事例8)

- ① He is an able student.      能力がある。
- ② He is a capable student.
- ①' (優秀だという意味で) 能力がある。
- ②' (人並みに) 能力がある。

↓

能力がある。

次に、東洋言語を代表させて韓国語の事例を見てみよう<sup>(4)</sup>。

- ① 마시다      飲む。
- ② 먹다
- ①' (水などを) 飲む。
- ②' (薬を)

↓

飲む。

上記の事例について、英語の場合と同様にして、①および②の日本語訳は「飲む」である。しかし、使用単語の相違により、より正確な意味はそれぞれ「水などを飲む」と「薬を飲む」となる。そこで、①'②'にその意味を( )付きで記述し、双方の違いを「明確化」した後、確認のために訳語「飲む」を付記する。以下、同様の事例をいくつか挙げておく。

## (事例1)

- ① 받다      受ける。
- ② 보다
- ①' (許可などを) 受ける。
- ②' (試験などを) 受ける。

↓

受ける

(事例2)

① 오다 降る。

② 내리다

① (雪・雨などが) 降る。

② (雪・雨などが) 降る。

↓

降る。

(事例3)

① 닫다 閉める。

② 잠그다

① (ドア・店などを) 閉める。

② (鍵を) 閉める。

↓

閉める

(事例4)

① 씻다 洗う。

② 감다

③ 빨다

① (手などを) 洗う。

② (髪を) 洗う。

③ (洗濯物を) 洗う。

↓

洗う。

(事例5)

① 만나고 싶다 会いたい。

② 보고 싶다

① (必要があつて) 会いたい。

② (必要がなくても) 会いたい。

↓

会いたい。

## (事例6)

- ① 오다 催す。
  - ② 마렵다
  - ③ 열다
  - ④ 나다
- ①' (眠りが・眠気を) 催す。
  - ②' (便意を・尿意を) 催す。
  - ③' (送別会を・会議を) 催す。
  - ④' (吐き気を) 催す。

↓

催す。

もう少し韓国語の事例を見てみよう。以下は、少し複雑な用法の事例を取り上げてみる。

## (事例7)

- ① 名 + 입니다. / 名 + 입니까? ~です。/ ですか?
- ② 母音で終わる名詞 + 예요. / 예요?  
子音で終わる名詞 + 이에요. / 이에요?
- ①' (丁寧で堅い文体) ~です。~ですか?
- ②' (丁寧でうちとけた文体) ~です。~ですか?

↓

~です。~ですか?

## (事例8)

- ① ~ 합니다. / ~ 합니까? ~します。~しますか?
- ② ~ 해요. / ~ 해요?  
하다用言の語幹は「하」+여요. / 하다用言の語幹は「하」+여요?.
- ①' (丁寧で堅い文体) ~します。~しますか?
- ②' (丁寧でうちとけた文体) ~します。~しますか?

↓

~します。~しますか?

## (事例9)

- ① 있습니다. / 있습니까? ~います。~あります。  
~いますか? ありますか?



② 있어요. / 있어요?

① (丁寧で堅い文) ~います。~あります。

~いますか? ~ありますか?

② (丁寧でうちとけた) ~います。~あります。

~いますか? ~ありますか?

↓

~います。~あります。 / ~いますか? ~ありますか?

## (事例10)

① 없습니다. / 없습니까? ~いません。~ありません。

~いませんか? ~ありませんか?

② 없어요. / 없어요?

① (丁寧で堅い文) ~いません。~ありません

~いませんか? ~ありませんか?

② (丁寧でうちとけた) ~いません。~ありません。

~いませんか? ~ありませんか?

↓

~いません。~ありません。 / ~いませんか? ~ありませんか?

## 4. おわりに

## (1) 要約

本稿の要約は以下のとおりである。

- ① 大学学部の1・2年次または語学学校の入門・基礎・初級レベルにおいて外国語を学ぶ際に、より詳細には語義が異なる単語でありながらその日本語訳が同一になってしまう単語の存在は、学習の進展に大きな障害となるものである。
- ② 上記の「異種同義語」の習得を補助する効果的な学習手法として「明確化」作業を提示した。が、これは初期の外国語の学習過程において各単語の意味を学習者に区別して把握するための手法として有効である。
- ③ 上記「明確化」作業の事例として、西洋言語からは英語、東洋言語からは韓国語を選び、その具体例を紹介した。

## (2) 課題

本稿の課題は以下のとおりである。

- ①「明確化」作業はもともとネイティブ教員とノン・ネイティブ教員の双方の教育効果を補完する橋わたしの手法としての意義を有するため、筆者のような外国語の「学習者」ではなく、より専門的な外国語の「教育者」による研究成果が期待される。
- ②「明確化」作業は手間のかかる学習作業であるため、その簡略化も視野に入れた改善が必要であるが、もともと語学学習はこうした手間をかけて積み上げていくことで効果を期待できる分野であるから、その意味を学習者によく説明し、理解させる必要がある。
- ③上記の課題に対処するため、講義担当者には講義内容改善のための持続的な努力が要請される。

### 【注釈】

- (1) 一般的な外国語教育法や外国語学習法に関する代表的な文献として、石橋（1991）、佐伯（1992）、竹内（2003）などが挙げられる。特に、近年における科学的な考察の研究成果としては、白井（2008）などを見よ。
- (2) 日本語教育法に関する文献として、藤井（1995）などを参照。また、本稿と同様の問題意識に基づいた研究成果として、迫田（2002）などが挙げられる。
- (3) 英語教育法に関する文献として、小寺・吉田（2005）や村野井（2006）などを参照。
- (4) 韓国語教育法に関する文献として、木内（2004）などを参照。

### 【参考文献】

- 石橋幸太郎『外国語教育』（成美堂、1991年）  
 小寺茂明・吉田晴世『英語教育の基礎知識』（大修館書店、2005年）  
 木内明『基礎から学ぶ韓国語講座・初級』（国書刊行会、2004年）  
 佐伯智義『科学的な外国語学習法』（講談社、1992年）  
 迫田久美子『日本語教育に生かす第二言語習得研究』（アルク、2002年）  
 白井恭弘『外国語学習の科学』（岩波新書、2008年）  
 竹内理『より良い外国語学習法を求めて』（松柏社、2003年）  
 藤井茂利『日本語教育法研究』（近代文芸社、1995年）  
 村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』（大修館書店、2006年）
- J. Dietrich and M. M. Kaiser, *Writing: Self-Expression and Communication*, Harcourt College Publishers, 1989.
- B. Johnstone, *The Linguistic Individual: Self-Expression in Language and Linguistics* (Oxford Studies in Sociolinguistics), Oxford University Press on Demand, 1980).